

所属するサッカーチームを選ぶ際の参考としてこの資料を作成しました。当チームの特徴や考え方の一部を明記したので、各ご家庭の教育方針などと照らし合わせて検討してください。

大切なことは、何が正しいかどうかだけでなく、賛同できることがどの程度あるか、だと思います。

当チームの考え方をできるだけ明確にすることで、ご家庭での賛否をはっきりさせやすくし、取捨選択に役立てば幸いと存じます。

※当チームの方針は、脳科学、心理学、発育発達学などに基づいて導き出したものです

※スポーツ先進国（サッカー先進国）の情報も積極的に活用しています

【1】大人（指導者と保護者）が『勝たせてあげる』指導をしてはいけません。

『勝たせてあげようとする』行為は、『早くできるようにしようとする』行為であり、『指示・命令・強制』を子どもに強いることになります。

すると子どもは、〔自分で考えることが面倒になり、何も思考せず、大人の言いなり〕になります。

子どもは人生経験が少ないため、社会経験が不足しています。大人はまずその前提を理解しなければなりません。社会性の乏しさを大人からの指示・命令で埋める教育を『注入主義』と言います。その結果、『自分の意見を表現しない大人』『周囲の様子で意見を決める大人』『自分で考えることを知らない大人』を育て上げることにつながります。まさに世界から見られている日本人像です。

スポーツ（好きなこと）は積極性や社会性を養うのに有効な環境です。たくさんの失敗、たくさんの失言をしながらも、自分で正解を導き出し、成否に気付き、改善策を練る。そういう時間を提供する手法を『開発主義』と言います。実体験（自分の考えで行動した結果）は記憶に残ります。その記憶は主体的なものであるため、記憶からさらに工夫や変更を自己決断によってさせられるようになります。

スポーツの失敗は勝敗には影響しますが命には影響しません。そういうおおらかな観点から自己開発機会を演出し、安心して各自のペースで成長できるように促すことが、大人の役割になります。

当チームでは、子どもたちに質問し、個性豊かな（自由奔放な）意見を引き出し、そこを整理する作業を指導者が手伝います。

そのため、『目の先の勝利を得やすい確率』は低くなりますが、『将来、自分の意見をきちんと言える人物に育つ確率』は高まります。そういう成長を促したうえでの勝利を『本物の勝利』と考えます。

ベンチからの頻繁な指示、保護者席からの応援という名の指示、これらを完全に否定します。

『勝たせる』指導と、『育てる』指導は、14才以下年代では両立しないことが普通です。

【2】成長速度、成長ペースは人それぞれ。成長過程の評価が経験の差になってはいけません

16才前後までの子どもたちは、『成長の早いタイプ』と『成長の遅いタイプ』があります。

小さいうちから「背の高い子ども」が将来も背が高いとは限りません。

小さいうちに「足が遅い子ども」が将来も足が遅いとは限りません。

小学6年生で165cmの長身だった子供が、17才のときに168cm程度の中背であることも、日本人にはよくあることです。

走る速さも10歳の頃走ることが苦手だったのに、16歳頃には速くなっていることがよくあります。

思考能力の成長も同じです。「考えることが遅い子ども」が20才頃には「頭脳明晰な人」に育っていることもよくあることです。

そのため、子どもたちの「現状」で、レギュラーメンバーを決めて（固定して）サブメンバーとの試合出場に大きな区別をすることはしません。

「早熟タイプ」を子どものうちから高待遇すると、その子は自信満々になり、他人を見下す傾向が強くなります。将来も人間関係が「今のまま」だと勘違いします。そして「晩熟タイプ」の子供たちが近づき、追い越す現実を恐れ、好きなスポーツを辞めてしまう（低い評価から逃避）ことが多々あります。

「晩熟タイプ」を子どものうちから低待遇すると、その子は「どうせ自分なんて・・・」という心理が強まります。自分には向いていない、努力は報われない、という固定概念を持ちます。そして自分の将来に明るい希望を持たず、能力が高まっても「でも俺なんて・・・」という心理によって、自分でブレーキを踏んでしまうことが多々あります。

日本のスポーツが長年に渡り発展しなかった大きな要因のひとつに、上記のことが影響しています。

（現在は情報化社会となり変化していますが、それはトップレベルの競技者に限定された成果です）

スポーツ先進国は「勝利至上主義」ではなく「たとえ子どもであってもスポーツをする権利を尊重、することを優先しています。

当チームは、この考え方を採用しています。日本では1964年東京オリンピック以降、絶対的に否定されてきた考え方のため、保護者世代には受け入れにくい方々が多い、と想定しています。

子どもにだって大人と同じように「人格」があり、それが未熟（熟成中）なだけです。

子どもは大人の「操り人形」ではありません。

他人の子どもと比較するのではなく、本人の過去と比較し、少しの成長を認め、大きな成長に感動することが、スポーツをする子どもたちを見守る保護者の役目です。

これらの理念を実行するために、以下のような内容で活動しています。

1・2年生までは対外試合はほとんど行いません。楽しむことに専念してもらいます。

3年生は月1～2回程度のペースで試合経験を積み重ね始めます。

4年生までは対外試合においてのレベル分けはほとんどしない方針です。

5年生途中から現状の各自の評価を指導者が示すことはします。「今の評価は未来の評価ではない」

「人は変化・進化するもの」というメッセージも同時に伝えます。

現状レベルによって出場時間に差がつくような手法は採用しません。「経験の差」はその後の「成長の差」につながります。それは育成年代を担う指導者がやってはいけないことだからです。

【3】「俺の言う通りにしていれば強くなる！」はハラスメント行為へと発展していく

コーチの指示に大きな声で「ハイ！」と返事をする。これは正常な人間関係ではありません。

『コーチに怒られないように』や『コーチに嫌われないように』は教育ではありません。

グラウンドでは大きな声で挨拶するが、街中では挨拶しない子ども。よくある光景です。

「負けて悔しくないのか？」と聞かれれば「悔しいです」としか応えられません。

「勝ちたくないのか？」と聞かれれば「勝ちたいです」としか応えられません。

「試合に出たかったらもっと上手くなれ」「レギュラーになりたかったらもっと練習しろ」

これらはすべて、ハラスメント気味の一方通行なコミュニケーション手段です。

当チームでは、出場するメンバーを子どもが自分たちで決めることを『普通』にしています。

大人は出場時間に差が発生しないように記録しながら見守ります。

出場するポジションは子どもたちの話し合いによって決めてもらいます。

小さい頃は『自分のやりたいポジション』を主張するだけです。

他メンバーと希望が重なることで、交渉する経験をしてもらいます。

希望通りだった子が、希望が叶わなかった子に配慮し、「次は交換しよう」と提案し始めます。

少し育ってくると、各自の個性を踏まえてチームバランス（攻守のバランス）を考慮し始めます。

子どもたちがメンバーやポジションを決める試合を原則としつつも、「この試合は大人が決めていいかな」と提案し、指導者からのアイデアを提案、実行してもらい、新たな『気付き』を感じてもらうようにしています。

子どもたちは必ず着実に成長していきます。大人に指図されずに主体的に行動していきます。

どうしても大人が指図しなければならない場面（危険な状況など）以外は、方針を貫きます。

指導者は、全体の調整役と、必要となった知識の提示、そしてマナー面の指導をしています。

マナー面も、一方的に押し付けるのではなく、なぜなのかの説明をしていきます。

このようなベース（基盤）を養ったうえで勝敗を競うことで、より楽しみながら上達を目指せるようになります。

失敗は普通のこと。負けることを恐れず挑戦する。失敗や敗北を冷静に受け止め、具体的な改善策を講じるスキルを養う一助にサッカー（スポーツ）を活用していきます。

勝ってほめることはしません。ほめる行為は『上から目線』です。

負けて叱ることはしません。叱る行為も『上から目線』です。

「勝ったら偉いの？ 勝ったら威張っていいの？ 自慢話を聞くことが好きな他人はいないよ。」

勝利の喜びは子ども同士で、仲間同士だけで分かち合い、仲間同士の自己満足で完結させましょう。

それよりも、具体的な内容の伴った会話を仕掛けて、戦術脳を磨くように努めます。

【4】保護者の負担を最小限に抑える活動をしませう

小学生サッカー団体によくある活動は、例えば以下のことだと思ひます。

- ◆週末は朝から晩まで活動（練習および試合）する日が頻繁にある
- ◆試合のために遠くへの遠征があり、保護者が車両協力を求められる（現地の集合から解散まで観戦・帯同が確定する）

当チームでは上記のような活動はほぼありません。

まず、あきる野市は屋外活動環境に恵まれています。市外遠方へ遠征しなくても試合会場を確保することが容易な地域です。そのため、年間の各学年の試合はほぼ市内会場（市民運動広場、雨間グラウンド、秋留台公園陸上競技場）になります。そのため、低学年のうちは保護者の送迎が必要ですが、4年生以降は子どもが自転車で会場入りすることが通常になります。

次に、サッカーは走り回るスポーツです。そのため、長時間活動や連日の活動は心身に大きな負担がかかります。練習活動は2時間以内。試合活動は3時間30分以内（午前のみ、午後のみ）を基本設定にしています。身体的な疲労を回復させる時間も重要です。サッカー以外のことに取り組むことで心理的なリフレッシュも重要です。特に子ども時代は『ひとつのことを深める』だけでなく『浅く広く経験する』ことも将来への基盤作りに役立てることができまう。

また、『ひとつのことを深める』行為にはリスクも伴います。将来に慢性痛が発症しやすくなります。野球なら利き腕の肩や肘を痛めやすいです。サッカーなら腰や股関節、膝を痛めやすいです。そのため、チーム活動は限られた時間で効率的に集中して行うことが重要です。

そして当チームでは、サッカーの動きに特化せず、全身（特に背骨、骨盤、肩甲骨）をほぐす運動メニューを加えることと、走り方の基礎メニュー、投げる運動なども導入しています。これは結果的にサッカーの上達にもつながります。

この資料や別資料でも記載している通り、小学生年代は成長速度に大きなギャップ（ばらつき）があるため、過度な競争原理に子どもを放り込むことは大きなリスクになります。そのため、大規模な大会には出場せず、大会試合か練習試合かの区別もせず、どの試合も等しく扱い、可能な限り良い経験になるように演出します。

「大会だから負けられない（失敗が許されない）」

「練習試合だから失敗してもいい」

プロでも失敗します。負けても終わりません。スポーツは勝利と敗北の両方で成り立っています。失敗を普通のことと捉え、失敗した瞬間から次のプレーに移れる思考を育てなければなりません。どの試合も勝利を目指し、得点を目指し、勝っても負けても経験という糧にできる人格を育みたいでう。

勝敗へのこだわり、大会へのこだわり、このような演出は14歳頃からが適正なので、独自のペースを貫き活動しています。（ヨーロッパには小学生年代の全国大会は存在しません）

おおらかに、楽しみながら取り組んでいても、着実に上達を実現することができまう。